

# 授業担当者インタビューによる「思いに寄り添う提案」の基盤づくり

Building Common Understanding toward Making Acceptable Suggestions through Interviews

鈴木 克明<sup>\*1</sup> 市川 尚<sup>\*2</sup> 高橋 暁子<sup>\*3</sup> 竹岡 篤永<sup>\*4</sup> 根本 淳子<sup>\*5</sup>

Katsuaki SUZUKI<sup>\*1</sup> Hisashi ICHIKAWA<sup>\*2</sup> Akiko TAKAHASHI<sup>\*3</sup> Atsue TAKEOKA<sup>\*4</sup> Junko NEMOTO<sup>\*5</sup>

<sup>\*1</sup>熊本大学 <sup>\*2</sup>岩手県立大学 <sup>\*3</sup>徳島大学 <sup>\*4</sup>明石高等専門学校 <sup>\*5</sup>明治学院大学

<sup>\*1</sup>Kumamoto University <sup>\*2</sup>Iwate Prefectural University <sup>\*3</sup>Tokushima University

<sup>\*4</sup>National Institute of Technology, Akashi College <sup>\*5</sup>Meiji Gakuin University

〈あらまし〉 対象領域の固有性に対応した応用力を備えた教育設計専門家を養成する研究の一環として、「ある領域から多くの学びを得るための問い」を参照した半構造化インタビューを実施した。その結果、「この領域で達成しようとしていること・そのための問いは何か？」と「この領域を学ぶことで世の中の見方にどう影響するか？」への回答に、各科目担当者の思いが鮮明に伺える結果が得られた。インタビューをすることが科目担当者の思いに寄り添う提案ができる基盤となることが分かった。その上で、担当者が望む授業を担当者の考えが及ばなかったレベルで提案する能力を備える必要がある。

〈キーワード〉 教育設計 (ID), 専門家, 特定領域, 半構造化インタビュー

## 1. はじめに

特定領域に強い教育設計 (ID) 専門家を養成する研究に取り組んでいる。特定領域に強い ID 専門家とは、どの領域でも活躍できる ID 専門家の汎用的基盤を備えた上で、特定領域において ID の専門性を応用できる ID 専門家を指す。我が国では、教科ごとの固有性を軸とした教科教育法に関する研究や各分野での熟達化研究の蓄積がある。これらの研究系譜を踏まえつつ、ID 専門家の共通基盤と対象領域の固有性をつなぐ「ID 専門家の応用力」とは何かを明らかにし、その養成に必要な学習環境を構築しようとしている。

本発表では、大学生の導入教育向けに開発された「ある領域から多くの学びを得るための問い」(鈴木・美馬 2018) を援用し、異なる領域を担当する教員が何を考えて授業を設計しているかを明らかにする試みの一端について述べる。

## 2. 研究の方法

筆頭著者を除く著者がそれぞれ、身近な研究者に協力を得て、表 1 に掲げる「ある領域から多くの学びを得るための問い」を参照した半構造化インタビューを実施した。その内容を持ち寄り、追加質問や収集資料として何が必要かを協議し、再インタビューを行った。

## 3. 研究の結果

表 2 にインタビュー結果の一部をまとめる。主として、「この領域で達成しようとしていること・解決しようとしていることは何か？」(問 2・3) と「この領域を学ぶことで世の中の見方にどう影響するか？」(問 7) についての結果に、各科目担当者の思いが鮮明に伺える結果が得られた。それぞれに自分の専門分野を踏まえた思いは強くある一方で、自分に課された科目の役割も担う必要があり、苦慮していることが伺えた。

表 1 : ある領域から多くの学びを得るための問い

- 1 この科目を学ぶ主たるゴールは何か？
- 2 この領域の人たちが達成しようとしていることは何か？
- 3 彼らはどのような問題を質問しているか？彼らはどのような種類の問題を解決しようとしているのか？
- 4 彼らはどのような情報やデータを集めているか？
- 5 彼らの領域に特有の情報収集方法は何か？
- 6 その領域で最も基本的な考え方・概念・理論は何か？
- 7 この領域を学ぶことで自分自身の世の中の見方にどう影響するだろうか？
- 8 この領域からの成果が日常生活にどう使われているか？

出典：鈴木・美馬 (2018), 表 5-3 (p. 51)

## 4. おわりに

インタビューは今後も、さらに領域を広げて実施していく予定である。特定領域に強い ID 専門家は、その領域の本質を聞き出すことを通じて、担当者が何を教えたいと思っているのかを理解し、共感していることを伝える必要がある。その共通理解の上で、担当者が望む授業を担当者の考えが及ばなかったレベルで提案する能力を備える必要がある。

### 謝辞

本研究は、平成 28-32 度文科省科研費 (基盤研究 B : 課題番号 16H03081) の補助を受けている。

### 参考文献

鈴木克明・美馬のゆり(編著) (2018)『学習設計マニュアル:「おとな」になるためのインストラクショナルデザイン』北大路書房

表2: 各科目担当者の思いについてのインタビュー結果(一部)

担当科目名	「この領域で達成しようとしていること・そのための問いは何か？」への回答	「この領域を学ぶことで世の中の見方にどう影響するだろうか？」への回答
文化心理学	モダンな心理学では解決できないこと・心理学が作ってきた問題を解決する一昔前の世代は批判で終わっていたが、代替案・改善案を出し、実践に移す。例: 転移が簡単に起きるような捉え方(実際は、転移が起きる状況は限定的)、客観的な評価(個人能力主義に偏りがち)	世の中の流行りのものに対して疑い深くなる。例えば、アクティブラーニングが入ってきたことによる組織、制度、人の変化に興味がある。新しい概念・道具によって周りが変わるの当たり前だと考えられるようになる。
発達心理学	臨床で困っている具体的な問題を、発達理論を用いて明らかにし解決を図る。例: おもらしが止まらない子供がいたらどう考える? こんな子供にどう関わるか? ⇒発達障害、チック症。例: 初老期にリタイヤした人がどこに向かうべきか⇒回想法(写真を見せたり、歌を聞かせたりして脳を活性化)を使って過去を振り返ってもらう中で自分はどこがすばらしいか、配偶者や親はどうかを考える	世の中にいろいろな人がいることがわかる。見方が変わる。それで人に対する関わり方が変わる。例えば、学校の中に変な子がいたけど、それは発達障害だったかもしれない。見方・考え方を超えてどう行動するかまでは授業では確認できないが、どう行動するかを考えてほしいと思っている。知識的なところは調べればいいので、教員と学生は大差がない。もの見方、考え方に一石を投じるには、アクティブに考えさせる
電気回路(専門は宇宙工学)	電流の振る舞いを明らかにして、推進力につなげる。どうすればより少ない燃料でより遠くまで飛ぶのか? ・エネルギーを発生させる→電気エネルギーに転換させる方法は?(火力、水力、風力、核融合…これらによってエネルギーを発生させるための基本はタービンを回して電気に変えること。エネルギー分野の問題を解決、使用としていえる)	豊かな生活を持続可能な形で今の生活をどうやって維持していくのか? 電気は、化石燃料の枯渇問題に代わるもの。今のこの分野の人が未来に向けてやっておかねばならないことはなにか? を考える。例えば、電気自動車を導入したときの責任まで考える(どうやって持続的にエネルギーを供給するか)→トヨタでは新しい電気の発生源として核融合を考えている。
ジェンダー論	ダイバーシティの受容。一人一人が個として存在することが守られるようになること。ジェンダー等は社会でどう認知されているか、メディアにどう表現されているか ・学生に授業で「男とは誰のことか? 女とは誰のことか?」と問うと、「問うまでもない」という反応が返ってくる。では、どういう定義がされているかという、国語辞典では以前は「女ではない方」などと書かれており、相対的なものである。ジェンダーの問題はもうわかっている(解決されている?)と思われる。このような学生(人)の意識変革も解決したい問題か。	社会を捉える目が変わる。授業で「生まれつき子宮のない人はどうなりますか?」とコミュニケーションカードに書いてきた学生がいた。それに対応する授業として、性分化のプロセスの説明の回で、分化プロセスのどこかでアクシデントが起こると子宮がないなどが起こるなどを行った。質問してきた本人は、単に挑戦的な質問のつもりだったということだが、そのようなプロセスがあり、自分にもあてはまるものであることに驚いたとのこと。男女がわからない人が生まれたとき、単に「かわいそう」ではなく、自分の問題として捉えられるという変化を期待している。
社会システム論	社会シミュレーションの実利用により、よりよい意識決定・理解・合意形成を行うこと。作ったモデル(プログラム)が妥当であるか? 机上の空論ではなく、意思決定上の支援につながっているのか? 自動化はできないのか? (モデル化を自動化するなど)	仕組みを意識しながら、物事を捉えられるようになる。感情論ではなく、まともな議論に基づいて意識決定する。議論をするには共通の言語が必要であることが分かり、何をするとどんな影響があるのかを予測できる。
情報システム学	情報技術のよりよい現場(社会)への適用。利用者が利用している情報システムの発注者と受注者間にギャップはないのか? (お互いが描いている理想状態にギャップがあるのではないか?)	現在動いているシステムについて、誰がどのように関わり、どのような技術を使って構成されているのか、構成要素が見えるようになる。例えば、スーパーのポイントカードを利用したときに、利用者としてはポイントがたまるだけだが、ポイントのコストをかけてでも導入した企業にはどのようなメリットがあるのかに思いをはせることができるようになる。
物理化学	物質の持つ化学的・物理的性質が、どのような因子に支配されているのか。その因子を人為的に制御する方法はあるのか。物理化学をベースとして…したら〇〇できるのではないかと言う仮説を立てる(ある理論を使ってこうやってできるのではないか? 仮説を立てて、実証する)	広い意味で化学反応に関係する論理的な「考え方」を与えるものなので、任意の世界の i) 広い枠組み ii) それを構成する要素 iii) その間の関係など、必要に応じた見方として影響を受けるかもしれない(理想的には)